

## 別紙 4

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目	共通点の探索による創造的思考の促進
------	-------------------

氏 名	山川 真由
-----	-------

## 論 文 内 容 の 要 旨

人々が日々の生活の中で抱える問題や、社会全体の大小さまざまな問題を解決するためには、しばしば、これまでの考え方から脱却した新しい発想が求められる。こうした発想のためには、物事に対して多くの人々がすぐに思いつく「目立つ」知識だけを用いて発想するのではなく、通常では着目しないような「目立たない」知識を用いることが重要である。従来の研究では、「目立たない」知識の活性化を自発的に行うことが難しいことが示されている一方で、それを促進する方法は十分に検討されていない。そこで本論文では、「目立たない」知識の活性化を促進する新しい方法として「共通点の探索」を提案し、その有効性を検討した。

第1章（序論）では、本論文で扱う創造的思考の範囲を明確にし、創造的思考の促進には「目立たない」知識の活性化が重要であること、それを自発的に行うことは困難であることについて述べた。さらに、「目立たない」知識の活性化を促進するための方法について検討した研究は少なく、十分に検討されていないことを指摘した。これらの先行研究を踏まえて、本論文で提案する「共通点の探索」という新たな方法を詳述した。最後に本論文の目的および構成を示した。

第2章（研究1）は、共通点の探索により「目立たない」知識の活性化が促進されるかを検証することを目的とした。そのために、共通点の探索と通常の連想を行った場合に活性化される知識の思いつきやすさの比較を行う2つの実験を行った。実験1では、関連性の低い2つの対象間で共通点を記述する条件（共通点探索条件）と1つの対象からの連想語を記述する条件（単語連想条件）を設定し、思いつきやすさを比較した。その結果、共通点探索条件の方が、単語連想条件よりも一般的に思いつきにくい回答が記述されていることが示された。このことから、共通点の探索は通常の連想に比べて「目立たない」知識の活性化を促進することが示された。実験2では、実験1の実験方法、評定方法を改善し、同様の結果を得た。

第3章（研究2）は、共通点を探索する対象間の関連性の程度が有効性に及ぼす影響を検討することを目的とした。そのため、関連性の高い単語ペアの共通点を記述する条件（関連性高条件）と関連性の低い単語ペアの共通点を記述する条件（関連性低条件）を設定し、参加者によって記述された共通点の妥当性、独自性、面白さを比較した。その結果、関連性低条件は、関連性高条件に比べて、独自の共通点が発見されることが示された。このことから、共通点の探索がより有効性を発揮する条件として、対象間の関連性が低いことが重要であることが示された。

第4章（研究3）は、独自の共通点を発見する上で必要なプロセスを明らかにすることを目的とした。そのため、課題遂行中の発話プロトコルを分析した。その結果、対象間の関連性が低い場合には、共通点を発見する方略として「調整」が用いられていることが示された。さらに「調整」を行って発見された共通点は、「調整」を行わずに発見された共通点よりも独自性が高かった。このことから、独自の共通点を発見する上で、「調整」は有効であることが示された。

第5章（研究4）は、共通点を多く発見する上で必要なプロセスを明らかにすることを目的とした。そのため、共通点の探索と類似した認知プロセスを有すると想定される他の課題との関連を通した2つの実験を行った。実験1では、共通点探索課題とカテゴリ列挙課題の回答数の関連を検討した。その結果、両者には有意な正の相関がみられた。実験2では、共通点探索課題の回答数とカテゴリ判断課題の評定値の関連を検討した。その結果、両者には関連が見られなかった。以上2つの実験の結果から、カテゴリ列挙課題とは共通するプロセスを有しているが、カテゴリ判断課題は異なるプロセスが関与していることが示唆された。そしてそのプロセスは、アドホックカテゴリを形成することであると解釈された。

第6章（研究5）は、共通点の探索が創造的思考を促進するかを検討することを目的とした。そのため、共通点の探索を事前に行う条件（共通点探索条件）と、単語連想を事前に行う条件（単語連想条件）を設定し、生成されたアイデアの量と質（実現可能性、独自性、面白さ）を比較した。実験1では、アイデア生成課題で用いる対象とは異なる2つの対象間に共通点を探索するよう求めた。実験2では、アイデア生成課題で用いる対象自体と別の対象との間に共通点を探索するよう求めた。その結果、いずれの実験でも、アイデアの量および質に条件間での差はみられなかった。このことから、アイデア生成の前に共通点の探索を実施するだけでは不十分であり、共通点の探索がより効果を発揮する介入を検討する必要性が示唆された。

第7章（総合考察）では、5つの研究によって得られた知見をまとめ、課題と今後の展望について述べた。得られた知見は次の3つである。(1) 研究1, 2から、関連性の低い2つの対象間に共通点を探索することで、「目立たない」知識の活性化が促進される、(2) 研究3, 4から、共通点を発見するためには「調整」という方

略の使用と、対象についてのアドホックカテゴリの形成が重要である、(3) 研究 5 からアイデア生成の前に共通点の探索を実施するだけでは、創造的思考を促進するには不十分であり、共通点の探索がより効果を発揮する介入を検討する必要がある、の 3 点であった。課題として、より広い文脈や対象者に拡張した実験を実施することの必要性、今後の展望として、「目立たない」知識の活性化が必要となる様々な状況への活用可能性について述べた。